

2023（令和5）年度 共栄データサイエンスプログラム 自己点検・評価

IT都市化センター運営委員会

委員長 伊藤 大河

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	IT都市化センター運営委員会で、プログラムの履修・修得状況の確認を行うことができる。なお、令和5年度は初年度ということもあり、履修者数23名、修了者数21名であった。これは、国際経営学部在籍者の2%、教育学部在籍者の1%に該当する人数であった。本プログラム対象の授業「特別講義A（データサイエンス）」では、Microsoft Teamsで作成した授業用チームを使用して各回の課題を提示し、提出状況や理解度が確認できるようにしている。これにより、提出状況や理解度が芳しくない学生に対して、サポートを実施することができる。
学修成果	前述の通り、本プログラム対象の授業「特別講義A（データサイエンス）」では、Microsoft Teamsで作成した授業用チームを使用して各回の課題を提示し、提出状況や理解度が確認できるようにしており、提出状況や理解度が芳しくない学生に対して、サポートを実施している。このことで、学生の理解度を把握しながら授業を進めることができる。また、学生からの課題提出を基に、学生の到達目標の達成具合を把握している。さらに、IT都市化センター運営委員会において、「学生による授業評価アンケート」集計結果や成績評価の状況等を分析し、学修成果の状況を確認する。この結果を踏まえて、次年度の本プログラム対象の授業の改善を実施している。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	「学生による授業評価アンケート」において、授業内容の理解に関する質問を設定している。令和5年度は、回答者全員が総合的にみて「わかりやすい授業だった」について「そう思う」または「どちらかと言うとそう思う」と回答しており、理解度は良好であると考えられる。自由記述欄では、「専門的な内容はわかりやすく例え話をしていただいたので理解できた」「時事問題も取り扱っており、現在の事情について理解できた」「教科書を中心に効率よく学ぶことができた」等のコメントが寄せられている。
学生アンケート等を通じた後輩等の学生への推奨度	「学生による授業評価アンケート」では後輩等の学生への推奨度に関する質問を設けていないが、「わかりやすい授業だった」「当該授業の内容・領域に興味をかきたてられた」「この授業を受けて満足した」といった質問を行っている。令和5年度は、「わかりやすい授業だった」「当該授業の内容・領域に興味をかきたてられた」に関し全回答者が「そう思う」または「どちらかと言うとそう思う」と回答し、「この授業を受けて満足した」には全回答者が「そう思う」と回答している。授業科目に対し好意的な結果であり、後輩等の学生への推奨度も高いものと推測される。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	令和5年度は初めての開講であったため、履修者数や履修率の具体的な目標は設けていないが、50人程度の履修者を見込んでいた。実際には、新設科目の周知が行き届かず、履修者数が伸びなかった。文系学部であり、データサイエンスへの苦手意識をもつ学生がいると思われるため、当該プログラムを学ぶ意義や丁寧な授業内容等を説明し、多くの学生が興味を持ち、履修してくれるよう促していく。また、国際経営学部では、令和6年度入学生より「データサイエンス」を卒業必修科目に位置付け、2年次に配当することとした。
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	令和5年度の時点では、当該プログラムを修了し卒業した学生は出ていない。今後は、就職課と連携してプログラム修了者の進路の把握を行う他、卒業生の就職先企業を対象に行っているアンケート調査等をととして、企業からの評価等を確認する。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	他授業科目のゲストスピーカーとして登壇した企業の方や学内の産学連携プログラムの提携先企業に協力を依頼し、当該プログラムの内容・手法、本学学生に対して期待する数理・データサイエンス・AIに関する資質・能力等についてヒアリングやアンケート調査を行い、結果をIT都市化センター運営委員会で共有し、プログラムの改善に活用する。 なお、協力者から、ここ数年、数理・データサイエンス・AIが社会人としてのリテラシーとなっており、学生時代に基礎を学んでおくことは必要であること、学生が「学ぶ必要性」を感じて積極的に受講するように大学としての取組が必要であること、今後入学してくる学生の変化に合わせて大学での教育内容を適宜見直していくことなどが指摘されている。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	InstagramやX(旧Twitter)等で話題となっているAIやデータサイエンスに関する話題を積極的に取り上げるなど、学生たちが「知っている話題」を導入とすることで、興味や好奇心を促す取り組みを実施している。そして、学生たちの身近な部分に数理・データサイエンス・AIが活用されていることに気づかせることで、学ぶ楽しさや学ぶことの意義を感じられるような工夫をしている。さらに、Microsoft Teamsで作成した授業用チームを使用して各回の課題で寄せられた内容も活用し、取り上げる事例の選定も実施している。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	本学では文系大学生のため、専門的な内容の理解に困難が生じる場合がある。本プログラム対象の授業「特別講義A（データサイエンス）」では、本学の担当教員が執筆した「大学基礎 データサイエンス」（実教出版）をテキストとしている。このテキストは、文系大学生や数学が苦手な学生を対象としており、生活に身近な具体的な事例を多く取り上げたり、数式を極力少なくして説明することで、数理・データサイエンス・AIの本質や活用の意義をわかりやすく説明している。また、担当教員による「例え話」や「生活に身近な例」を挙げて説明することで、楽しくわかりやすい授業となるように工夫している。